

『総研大 文化科学研究』を創刊

Sokendai Review of Cultural and Social Studies

鈴木貞美

総合研究大学院大学学長特別補佐/人間文化研究機構国際日本文化研究センター教授

総研大文化科学研究科は、本年7月、人文・社会学系では日本初のレフェリージャーナル『総研大 文化科学研究』を創刊した。広く国内外から投稿を募り、外部のレフェリーによる選考をパスした研究論文を掲載、世界に発信する。

文化科学研究の国際的発展をめざして

今年（2005年）7月、『総研大 文化科学研究』（Sokendai Review of Cultural and Social Studies）を創刊しました。これは、総研大文化科学研究科が運営する国際的、学際的に開かれた高水準の文化科学系総合学術誌で、人文・社会学系では、日本ではじめての電子ジャーナルです。また、プリント版も刊行します。

創刊の目的の第一は、「文化科学研究の国際的、学際的発展に寄与すること」です。広く内外の研究者から投稿を募ります。

今日、学術全般においてグローバル化が目覚しく進展しています。文化科学においても、どの専門分野の研究も、学際研究も、国際的に通用するものが求められる時代に入っています。そして、一専門分野の研究は、他分野の研究の発展に寄与し、学際研究は個別分野の研究にフィードバックされうるものが求められています。

逆にいうと、一国、また一分野の中でだけ通用し、それで自足している研究では、ことばは悪いのですが、すぐにバケの皮がはがれる運命にあります。たとえ日本人による日本に関する研究であっても、それは変わりありません。これからは、国際的、学際的な研究水準に達しているものだけが、すぐれた研究として評価されることになってゆくと思いますし、

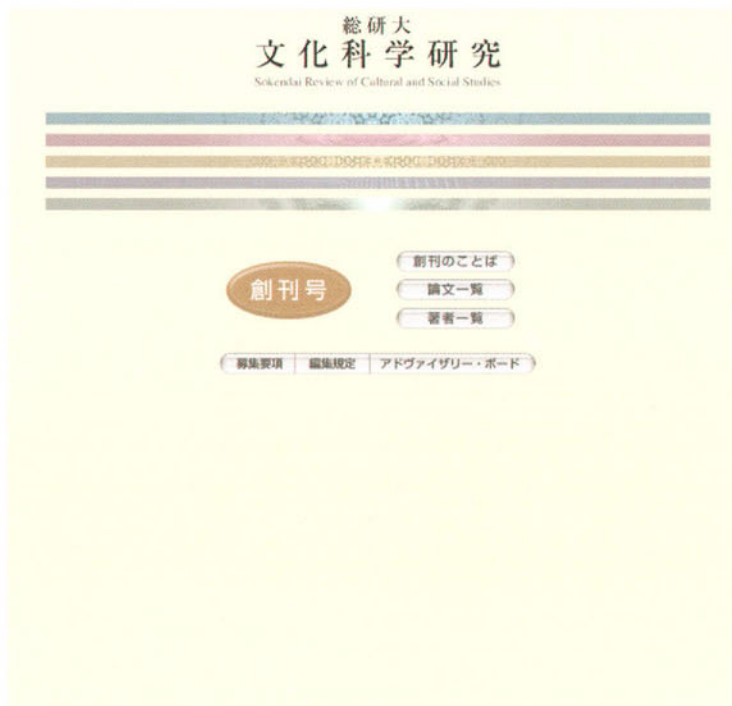
その予兆はすでにあちこちに現れています。

その研究水準を確保するために、『総研大 文化科学研究』は、内外の第一線の研究者にレフェリーを依頼します。そして、内外の誰でもが容易に眼を通すことができるようにするために、電子媒体とプリント媒体の2種類を用意し、内外に発信します。

自然科学系では、英語の論文が、ほぼ国際標準として通用しています。また、

英語圏の日本研究については、すでに、すぐれた実績をあげている先行例もあります。しかし、その門戸は、英語で立派な論文の書ける日本研究者に開かれているにすぎません。あるいは、英語と他の諸国語の対訳ジャーナルの試みもなされていますが、翻訳の手間や費用を考えると、すぐれた論文をはやく発信することはできません。

また、文化科学系の外国人研究者の場合、日本に関する研究ならば、日本語で



【総研大 文化科学研究】
http://www.soken.ac.jp/japanese%20pages/journal_bunka/index.html

論文募集要項

応募資格、枚(語)数、言語は問いません。

- 論文(end note方式、欧文の場合、両端揃えなし)には、応募時に、当該言語ないしは日本語のサマリー(A4 40×40字、1~2枚程度)
英文サマリー(A4 double space, 0.5~1枚)、key word (5~10)、および総研大文化科学研究科の専任教員による推薦文をつけてください。
- 推薦文は、日本語または英語で、推薦する論文の「テーマ、方法、学術上の意義」について、A4(日本語の場合40×40、英語の場合double space)1枚程度にまとめてください。論文とともに本誌に掲載します。
- 総研大(専任・客員)教員が応募する場合は、自薦文を上記要領でつけてください。
- 論文の区分は(1)論文 (2)研究ノート (3)資料紹介 の三区別とします。
- カラー写真は、論文ごとにまとめて掲載します。
- 締め切り:毎年12月1日(厳守)
- 提出先:推薦者の所属する専攻の本誌編集委員。
- 刊行:毎年年度末(e journalは総研大本部ホームページ)、活字媒体でも発行します。
- なお、論文表記の体裁については、本研究科各専攻の本誌編集委員にお尋ね。

2004年11月1日
総合研究大学院大学文化科学研究科 専攻長会議
(2005年1月25日、訂正)

[閉じる]

「総研大 文化科学研究」アドヴァイザリー・ボード

ペフ・ハルミ (スタンフォード大学名誉教授)
田辺繁治 (大谷大学教授)
フミコ・井川・スミス (マツキル大学教授)
ケイト・ナカイ (上智大学比較文学部教授)
ジョン・クラーク (シドニー大学)
井上宗雄 (立教大学名誉教授)
ハルオ・シラネ (コロンビア大学教授)
鳥越龍之 (早稲田大学教授)
五味文彦 (東京大学教授)

[閉じる]

表2「総研大 文化科学研究」アドヴァイザリー・ボード

表1「論文募集要項」

論文を書き、日本で発表し、評価されてこそ、自国でも認められる、という場合も少なくありません。また、現在のところ、読者の数を考えるなら、英語で発表する方がよいが、しかし、なぜ、日本についての研究を、たとえばロシア人が、英語で書かねばならないのか、という疑問も出されています。

『総研大 文化科学研究』が目指しているのは、英語はもちろんですが、日本語でも、中国語や韓国語、その他の言語であっても、国際的に通用する学術の水準をもった論文なら、何語であっても掲載し、発信することです(表1「論文募集要項」を参照してください)。英文のサマリーをつけていますから、掲載論文のうちに、これは自国語に翻訳することが望ましい、と思う人が出てくるなら、やがて何語かに翻訳されることになるでしょう。

そのような論文がどんどん掲載されれば、『総研大 文化科学研究』は国際的に注目されるレビューになり、また、投稿も増えるでしょう。1年でも早く、そんなレビューになることを望んでいます。

推薦制をとり、原則として研究科の外部のレフェリー2名に審査を依頼するのは、開かれた高水準の学術雑誌を目指しているからです。推薦文も掲載し、その

論文の特長が、よくわかるようにしています。

言い換えると、『総研大 文化科学研究』の編集委員会には、国際的に第一線で活躍するレフェリーを選ぶ能力が、たえず問われています。それゆえ、その相談や審査の適不適など、運営全般について、いつも眼を光らせてもらうアドヴァイザリー・ボードを組織しています。(表2「アドヴァイザリー・ボード」を参照してください)

国際的、学際的な学術雑誌は、しかし、いったい誰が購読するのか、という大きな難点を抱える宿命にあります。そこで、簡単に検索でき、自分に必要な論文をすぐにダウンロードできる電子ジャーナルがふさわしいのです。ただし、現在のところ、日本の文化科学系では、電子媒体は、まだなじみが薄く、プリント版もぜひ、との声が多く、プリント版や抜き刷りの要望にも応えることにしました。

国際的に通用する研究者の育成の場として

『総研大 文化科学研究』創刊の目的の第二は「総研大文化科学研究科内の連携強化をはかること」、目的の第三は「各専攻所属の専任・客員教員、大学院生・研究生に論文発表の機会を提供すること」にあります。

文化科学研究科を構成する各専攻の基盤機関は、大学共同利用機関ですが、その設立の目的も、経緯もそれぞれ異なっています。所属する機構法人も、ひとつではありません。

しかし、国際的に通用する高度な能力をもつ研究者の育成という点において、各専攻の目的は一致しています。『総研大 文化科学研究』の創刊のきっかけは、まさに、その点にありました。

つまり、各専攻の教員と院生が、共通の論文発表の場をもち、その場を国際的に有力な場として育ててゆくこと、そのような目的のもとに、互いに協力しあうことができるならば、文化科学研究科の研究科としての発展に寄与することになるのは、明らかです。そこで各専攻長が全員一致して、創刊に向けて、一肌腕いしてくれたわけです。

そして、実際に企画してみると、各専攻それぞれに、このような場を必要としていることが、より明らかになりました。仕事量が格段に増えることを承知の上で、皆さんが取り組んでくれました。

国際的に通用する研究者の育成は、国公立を問わず全国の大学院が目指していることですが、しかし、総研大ほど、その条件にめぐまれているところはあり

ません。それは教員の自己研鑽の機会においても、院生の教育条件においても、そう言えます。そのような条件に恵まれた総研大の文化科学研究科が、国際的、学際的にひらかれた機関誌をもつことは、日本の文化科学系の学術を、その面でリードする役割をはたすことになりますし、ぜひとも、そうありたいと願っています。『総研大 文化科学研究』は、そんな思いから生まれました。

『総研大 文化科学研究』は、投稿原稿の分量を制限していません。大きなテーマと取り組む論文や、博士論文の一部分をなすような論文を掲載できる学会誌や紀要は、ほとんど無いに等しい現状を打破するためです。ぜひ、力作を寄せてください。

今後の課題

『総研大 文化科学研究』は、まだ、創刊したばかりです。創刊の企画を固めてから、ほぼ半年でしたので、創刊号は、すべて日本人の総研大専任教員と院生による日本語の論文となりました。(表3「創刊号掲載論文一覧」を参照してください)

創刊のお知らせを、大学本部のホームページに掲載しただけで、総研大専任教員の推薦制を外してほしいという要望が海外から何通も舞い込みました。それだけ、海外の研究者の潜在的な需要が多いことがわかりましたが、もし推薦制を無しにすると、編集委員会は膨大な投稿に、対応しなくてはなりません。これは現状では無理だと思います。

もし、海外により広く門戸を開くには、海外に総研大文化科学研究科と提携する推薦委員制度を何らかのかたちでつくるしかないでしょうし、編集スタッフの補充も必要になると思います。

また、文化科学系の論文の水準も分野によって大きく異なります。同一のレビューで論文の記述形式が整っていないことは、常識では、エディター・シッパの欠如と映りますが、はじめから、無理して統一するよりは、今後待つことにしました。

論文の評価基準の問題も、大きな課題

です。本レビューに限らず、そして、内外ともに錯雑とした状態にあるのが実情です。これについてはレフェリー・ペーパーに、ささやかな工夫をして、ごく緩やかなものですが、標準らしきものをつくってみました。今後の検討にゆだねたいと思います。国際経験豊かなレフェリーに審査依頼をすることで、少しずつ整ってゆくのではないかと楽観していま

す。そして、その点でも、『総研大 文化科学研究』は、国内諸分野の研究に刺戟を与え、幾分かの貢献をなしうるものになると考えています。

なお、編集規定などもすべて、創刊号で公開しています。ご意見、ご希望なども編集委員会へお寄せくださいますようお願いいたします。

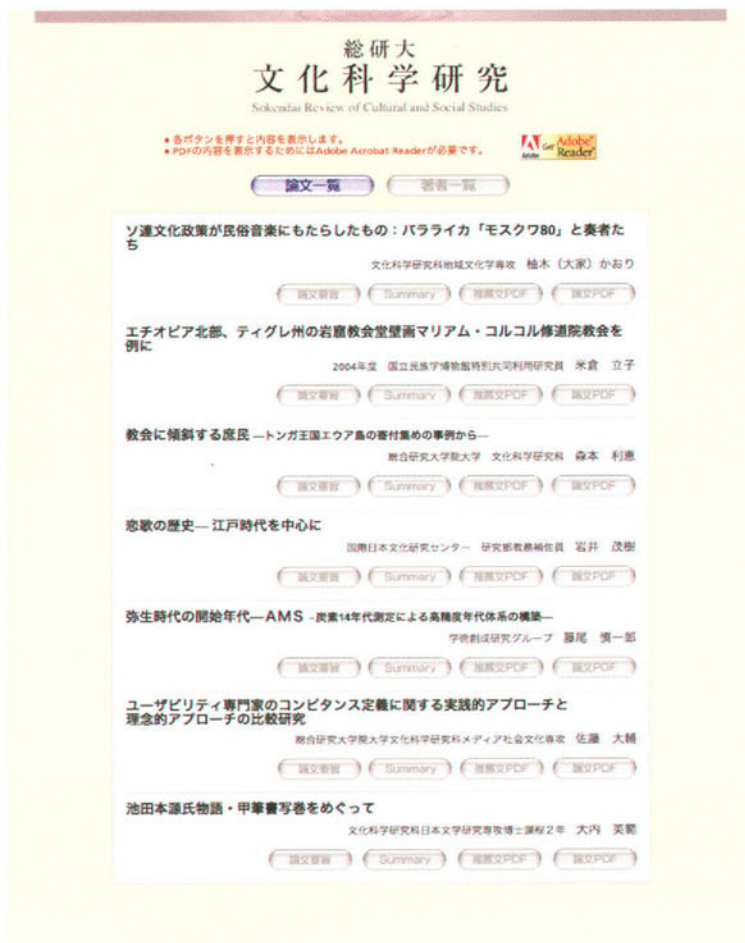


表3『総研大 文化科学研究』創刊号の論文一覧

鈴木貞美 (すずき・さだみ)

日本近現代の文芸・思想・文化史の書きなおしに長年取り組み、国際的に活動。現在は、とくに「文学」「歴史」「宗教」「生命」などのキイ・コンセプトの再編成過程、進化論受容など生命観の変遷、「大日本帝国」の文化史に力を注いでいる。学際研究の有効な推進にも心をくだいており、そんな思いを込めて創刊号編集長として『総研大 文化科学研究』を立ち上げた。

